

うのですが職員も判断が難しい。私の場合は小学校の高学年の頃に「何で僕はここにいるの？」と事務の先生に質問をしました。「あなたは、おばあちゃんにおんぶされて来たんだよ。」と説明を受けましたが、“こんな事、聞いても良いのかな？”“聞いたら自分が壊れちゃうんじゃないだろうか”と、子どもなりに何か目に見えない圧力を感じたり、非常に激しい葛藤を経てやっと口に出せた記憶があります。

中学2～3年頃の将来を決定する頃に職員に自分のルーツをもう少し正確に尋ねる時期が来ます。しかし、私は聞くことが出来ず、高校へ進学する際に進路問題から派生して、父母の事と自分が入所した事情を聞かされ、非常にショックを受けた記憶があります。

思春期になると“自分とは何か”という本質的なテーマに向き合う時期がありますが、残念ながら児童養護施設というのは一人になれる空間がなかなか保証されにくい面がありました。私もトイレの中で自分の内面を見つめるなど、様々なことを考えました。そういう時期にも面と向かって納得できる説明を受けることはとても大切なことで、施設も一人ひとりの切実な疑問に答えられるような体制が望ましいかなと思います。

その後も、アパートを借りるのに連帯保証人がおらず、高校の先生に頼みに行ったことがあり、身分の保証、就職時の社会の理解の問題などは大きな課題であると思います。

現在は児童養護施設も個別的な処遇や施設の小規模化を推進する動きが出ています。その点では前進かと思いますが、その反面、1対1の関係がとりにくく、職員との関係ではかえって子どもを深く傷つけてしまう可能性があるという課題もあります。今後、児童養護施設が子どもの生活の場として社会的な役割を果たすためには、職員の力量・資質の事を同時に考えないといけないと思いますし、施設を出た後も子ども達との関係を深めていく、人としての繋がり

を継続していこうということが大事なような気がします。

＜西田 寿美氏＞

あすなる学園 学園長/医師

子どもの治療をしていると、子どもに対する親御さんの見方や教師の理解の仕方でも子どもの健康度が違ってくることがあり、まさに大人の対応次第だなど思うことがあります。逆に言えば、親御さんが子どもの悪い面しかみれなくなる、子どもはそれに反発するか、症状に逃げ込むしかなくなる。親御さんが分かっているながら感情的に反応することを繰り返して、子ども自身の自己イメージが悪くなるという親子関係の悪循環が続くようになった時には早く介入（＝入院）した方が良いと考える様になりました。

入院するという事は親子が離れ離れになることであり、子どもにも親御さんにも辛く、様々な感情の揺らぎがおこります。それを大人は「子どもがもっと楽になるために」と共有することで初めて子どもは安心して入院することができます。入院中の新しい人間関係では、今までとは違う大人の対応を受けることによって「がんばろう」という気持ちになり、頑張ってみたら違う世界が開けます。その様な中で子どもたちの自己イメージが変わって、地域で、家で、もう一度やり直したいという気持ちになった段階で退院となります。しかし、様々な事情で家庭に帰れない場合、子どもは自分の問題と自分を取り巻く家族の問題に直面せざるを得なくなります。その時に、めげずに希望を持てるように援助できるかが大切だと思います。新しい大人との出会いがプラスになるまで、今までよく知った人が関わった方が良いと思います。しばらくは頻繁に会い、子どもが新しい環境に慣れ安心できるようになったら徐々に会わなくなり、そのうちに忘れてもらったらいいと思ってます。生活の場には子ども自身が気づいていない自